

流れやまぬ一切方法、変わりはてゆく我が相、恩師をお送りして、

加茂法話会 平成三十年十二月二十五日

一、無常たの憑み難し、知らず露命いかなる道の草にか落ちん、身すで己に私に非ず、命は光陰に移されて暫くも停め難し、紅顔いづくえか去りにし、尋ねんとするに蹤跡なし、

熟観じゆかんずる所に往事の再び逢うべからざる多し、無常たちま勿ちに到るときは国王大臣親じつ従僕妻

子珍寶ちんぼうたすくる無し、唯獨り黄泉こうせんに趣くのみなり、己おのれに随したがい行くは只是れ善悪業等のみなり。

死（無常）というものは、いつやってくるか、予想もつかないものです。草叢くさむらに宿る命のようにはかない命は、いつ、どこで消えるか全くわからないものです。大体、自分のこの身体というもの、（因縁和合でできているもので）自分のものではありません。

命は又、光陰と共に先が短くなるもので、ちよつとの間も引き止めておけるものではありません。少年の日の若さにあふれたあの顔は、どこへいつてしまったのでしょうか。探し求めようとしても、あとかたもありません。

よくよく観察してみると、過ぎ去ったことは、二度とめぐり逢えないことです。死（無常）が突然にやってきた時には、国王も大臣も、親しい友も従う部下も、妻子も財産も、手を貸してはくれるわけにはいかないのです。たった一人で黄泉（あのよ）へ旅立つばかりです。どこまでも自分についていくものは、ただ自分が作った善行・悪行ばかりです。

修証義 第三節

二、去る十一月二十日午後十時 永平寺顧問、元永平寺副監院、六回の永平寺授戒会説戒師 福井県大飯郡おおい町・清福寺七世中興・祖嶽浩哉大和尚（木崎浩哉 世壽九十三歳）、遷化。

その生き方は、

『春風をもって人に接し、秋霜をもって自ら慎む。』

佐藤一斎 言志語録三十三

『人には親切、自分には辛切、法には深切』

臨濟宗 山本玄峰禅師

木崎浩哉老師の照光殿で法話中の写真

三、「初心忘るべからず」 世阿弥『花鏡』

是非初心を忘るべからず
時々の初心忘るべからず
老後の初心忘るべからず
命には終わりあり
能には果てることあるべからず」

無我夢中でやるところに見ごたえがある。芸としては不十分でも命がけでやっているところに輝きがある。

四、流れやまぬ一切方法、変わりはてゆく我が相

永平寺七十四世佐藤泰舜禅師

東龍寺住職 渡邊宣昭 合掌